Japan society of Home Economics

日本家政学会誌 Vol. 56 No. 4 255～263 (2005)

黒江塗の製造家屋にみる住まい方の特性と変容

千森督子，谷 直樹*

（和歌山信愛女子短期大学，* 大阪市立大学大学院生活科学研究科）

原稿受付平成16年11月4日；原稿受理平成17年1月26日

The Distinctive Characteristics and Evolution of the Households Producing Kuroe-Nuri

Tokuko CHIMORI and Naoki TANI*

Wakayama Shin-ai Women's Junior College, Wakayama 640-0341

** Graduate School, Department of Human Life Science, Osaka City University, Osaka 558-8585*

This paper traces evolution of the households producing Kuroe-nuri, the traditional lacquerware made in Kainan, Wakayama Prefecture, from the closing years of Edo period to the early Showa period. Machiya or tradesman's houses in Kuroe as elsewhere were designed for both domestic and professional use. The craftsmen who specialized in coating wares with lacquer or those who specialized in painting the lacquered ware used the upper floor of the main house, while those who specialized in producing the toxic lacquering fluid used Kura or outhouse for work. The production of lacquering fluid was the first of the three crafts hit by the waves of modernization. The production continued to be shifted from Machiya to factories from around 1920's to 1930's. Then, from around the mid 1950's, the market came to be dominated by cheap plastic wares lacquered by spray coating, a technique unsuitable for domestic production, and the other two crafts too had to leave Machiya one after another. The traditional fusion of household and lacquering work at Machiya closed its history in 1970 when the Kuroe-nuri production began at the industrial complex for lacquerware.

(Received November 4, 2004; Accepted in revised form January 26, 2005)

Keywords: Kuroe 黒江, lacquer industry 漆器業, Machiya 町家, craftsman 職人, lacquer painters 塗師屋, modernization 近代化.

1. はじめに

町家では，商工業に関わる様々な職と日常の生活とが一体となった住生活が営まれており，職種によって建物の形式や住まい方に特性が生じている．とりわけ，生産に携わる生業は，職と生活の場の兼ね合いに多様性がある．例えば，西陣織の機屋のように手機が並ぶ作業場を主屋の横や奥に隣接して配するものや[1]，紀州湯浅の醤油醸造業や伏見の酒造業に関わる町家[2][3]のように広い敷地をもち，蔵を中心にした生産のための専用の建物を幾棟も配するものもある．職住の空間的な構成は職種によって異なると考えられるが，本稿では，製造業の一分野である漆器業と町家の関係を，黒江塗の産地である和歌山県海南市黒江の町家を取り上げるなかで考察したい．

黒江塗の起源は明確ではないが，江戸時代前期にはすでに産業として確立され，紀州の特産品として広く諸国に出荷されるようになっていたことが，俳諧書『毛吹草』*1から知れる．紀州藩は漆器産業の保護・育成策のひとつとして技法の模倣を禁じるために，黒江一村に渋地椀製造地域を限定した．江戸時代後期の『紀伊続風土記』[4]の物産部には，「名草郡五箇荘黒江村にて二百年以前より渋地椀及木具折敷類を製し出し諸国へ鬻く今は國として至らさる所なく其製最佳好なり」と記され，江戸時代全般に亘り黒江の漆器業が繁栄していたことが窺える．

当時の黒江の地は，船尾山と城ヶ峰，城山の山々に三方を挟まれ，西端は入江であった．町場は東北から

*1『毛吹草』（松江重頼編纂）の自序に寛永15年（1638）の年紀があるため，すでに17世紀には黒江渋地椀が紀州の特産品になっていたことがわかる．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

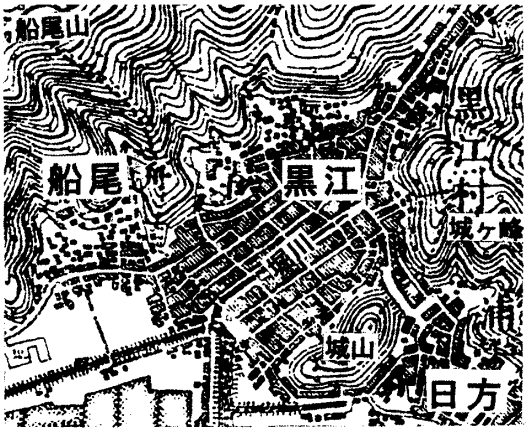

図 1．明治中期頃の黒江村周辺図
『明治前期関西地誌図集成』掲載仮製地形図に字名等記入．

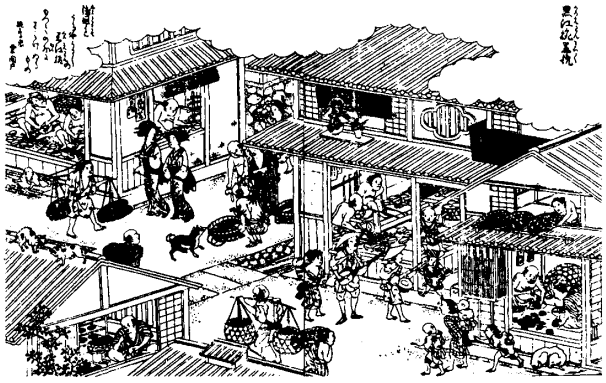

図 2．「黒江椀器挽」
『紀伊国名所図会』所収．

西部へと広がり，町の中央には東西に堀川が流れ，海上輸送に直結していた．

図 1 は明治中期の黒江村の周辺地域を示したもので，埋め立てによって西部が広がっている様子が窺われる．近代以降は株仲間の制度がなくなり藩の後ろ盾を失うが，漆器産業は町の主要産業として継承されていった．

府県別の漆器生産高をみると，明治 11～16 年（1878～83）には黒江は全国一の生産高を誇り，大正 13 年（1924）*2，昭和 32 年（1957）には 5 大漆器産地に数えられた[5]．

このように，黒江は 400 年以上に亘り，町という地域社会が一つの産業に従事するという特殊性のもとで漆器の町として形成されており，黒江の町家は漆器業と深く関わってきたと考えられる．

黒江の町家と漆器業との関連については，既往研究[6]の一部で取り上げているが十分に論考がなされたとは言い難い．そこで本稿は，伝統的な製造方法が行われた江戸時代後期から昭和前期までの漆器製造に関わる家屋を対象に，漆器業と町家の関係，さらに漆器業の近代化と家屋の変容について，文献資料と調査資料の双方から検討を加え，新たな知見を得ることを目的としている．

2．近世の絵画資料からみた製造工程と家屋との関係

最初に，江戸時代後期における黒江塗の製造工程と家屋の関係をみておきたい．当時の黒江塗の製椀業は，下地塗り，上塗りを行う塗師屋が中心で，これとは別に木地屋の組織があった[7]．その様子を図像的に知ることができる資料として，文化 9 年（1812）に発行された『紀伊国名所図会』第 2 編の挿絵「黒江椀器挽」（図 2）を紹介したい．同書には，第 3 編に「氷豆腐製造」，後編に「駿河屋店」（饅頭製造），「庄村御霊神社　肉桂栽培」「石垣荘中肉桂製薬」（薬製造），「男山陶器場の図」などの製造過程を描写した挿絵がある．絵画という限界はあるものの，いずれも製造手順を示し，製造場所をも具体的に描写している．

「黒江椀器挽」には，街区の一角に木地，下地塗り，上塗りと分業化された作業風景が描かれ，黒江塗の製造工程と職人の居住形態との関係，町における分業体制を 1 枚の絵の中に凝縮して表現している．素地である椀木地は，産地で製材して荒型を作り，黒江に移送して仕上げる方法がとられていたが，図をみると，椀素地を籠に入れて密集した町中を木地屋と思われる家に向かって運ぶ人がいる．黒江では，木地の外側を削る，小尻を削る，内側を削る過程を経て，木地が椀として完成されるが，道を挟んで 2 軒の木地屋が描かれ，木地師は塵埃処理に都合が良く，工作に便利な 1 階で作業している．そのうちの 1 軒は，銑などを使って木地の外側を削り，鉋をかけている．もう 1 軒は手回しの轆轤による二人挽きが行われ，内側を削っている．

隣家の塗師屋では 1 階で下地塗り*3をし，庇で乾燥させている*4．さらに，道を挟んだ手前の家の 2 階では塗師が上塗りをし，棚で椀を乾燥させている．棚は

*2 大正 10 年（1921）以降は，「黒江塗」から「紀州漆器」に名称が変更する．

*3 当時の下地は，漆ではなく柿渋に炭粉を混ぜたものを塗る渋下地で，漆下地の本堅地に比べて工程が簡単で，多くの漆器を作るのに適していた．

*4 明治 34 年（1901）生まれの塗師村岡峰楠氏の話によると，大正初期においても渋下地は竹で作った網の上に載せて屋外で日干しをしていたという．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

「風呂」と呼ばれ，椀用の風呂は小型で中に何段もの桟があり，それが綿密に描かれている．各家に分かれた分業体制を示すかの様に，道行く人々の中には塗師屋から出来上がった漆器を運ぶ人もいる．

以上の知見を整理すると，渋地椀の製造は1軒の家の中で作業工程が分化するのではなく，各家単位で木地と塗りに分かれ，木地師の段階では1階の表の間を仕事場に使い，塗師では下地は1階の表の間，上塗りは2階で作業が行われている．製造場が町家の主屋であることと，江戸時代後期に，すでに2階屋が発達し，塗間が2階にあることに注目したい．

黒江では，江戸時代末期に独立した絵屋と，漆の精製業者が出現したことが先行研究[8]で明らかにされているが，これは『紀伊国名所図会』の発行（文化9年）以後の変化である．

3. 漆器関係家屋における居住形態の特性と変容

つぎに，職種別に家屋形式と住まい方の特性をみていきたい．昭和50年（1975）と58年（1983），平成9年（1997）に家屋調査と，聞き取り調査による住まい方調査を行った．その結果，当時とそれ以前に遡る資料が得られた．ただし，木地屋は昭和40年代以降に激減し，現存する家屋で確認が困難であったため，ここでは塗師屋と絵屋，漆屋を取り上げる．

(1) 塗師屋の家屋と作業場

漆器産地でも輪島や会津，木曾平沢では，塗師蔵を用いて髹漆作業が行われた[9]．漆液の乾燥には，室温25～30度，湿度は80%前後が適当とされるが，蔵は外気の寒暖が伝わりにくく，適温，適湿が保ちやすい造りである．輪島の塗師屋は製造と販売を兼営し，塗師職人を雇用した塗師問屋であり，輪島の町家のなかでも大店である．図3は塗師屋の一例で，その敷地規模は，間口8間，奥行き21間であるが，塗師屋でも中等位の部類である[10]．屋敷は表通りに生活のための主屋，敷地の奥に塗師蔵が配置される空間構成である．主屋の内部は通り土間に沿って居室が配され，下地場と塗師蔵へ繋がる[11]．髹漆作業に蔵を用いる方法や住まいと蔵の位置関係は，会津や平沢でも同様である．

一方，黒江の塗師屋の作業場（塗間）は，江戸時代末期から昭和初期の家屋に至るまで，主屋の2階にあり，髹漆作業は2階で行われ，生産空間と生活空間が上下階に分離する住まい方に特徴がある．

菱山幸三家（図4）は，江戸時代末期と推定される建物で，2階の塗間への階段は前土間に付けられ，居室を介さずに直接土間から昇降し，材料や製品を搬出入する．製造では，製作技法が外部に漏れることを極力避けるように配慮されたが，2階は独立性が高く，階下より温度，湿度を適度に保ちやすい．天井や窓を紙などで目張りし，密閉して気密性を高めるが，これは埃を防ぐ工夫も兼ねた仕様である．塗師は塗間の中央に座り髹漆作業を行い，上塗りした製品は塗間の隅に置かれた風呂で乾燥させる．風呂は欠くことのできない装置で，前面に引き違いの板戸が入り，高さ1間，幅1間半，奥行3～4尺程の大きな木箱の戸棚である．椀用，板物用と用途により規模や棚の高さが異なる．

糸川益夫家*5は，明治41年（1908）に塗師屋として普請され，主に会席膳を製造していたので，出来上がった製品を積み上げる必要性から1階天井高は9尺

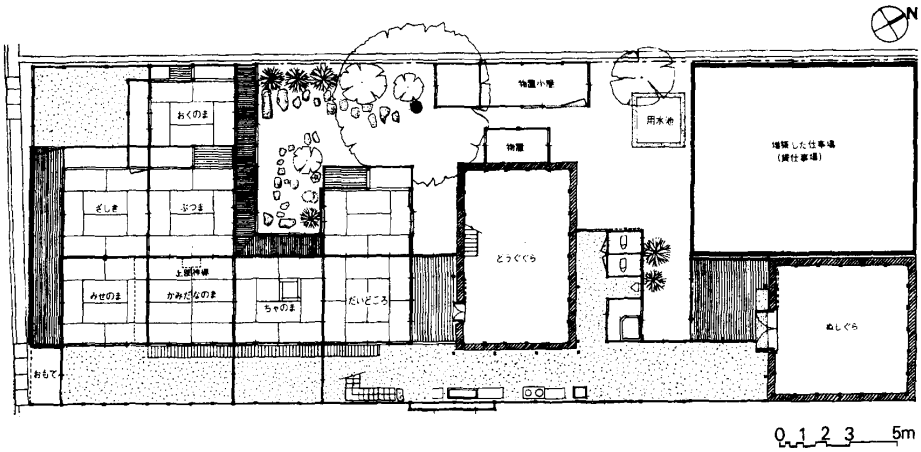

図3．輪島塗の塗師屋平面図

上田　篤，土屋敦夫（編）：『町家共同研究』所収．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

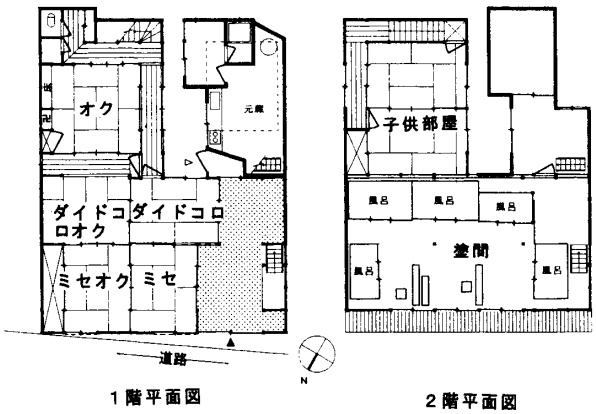

図4．菱山幸三家住宅平面図

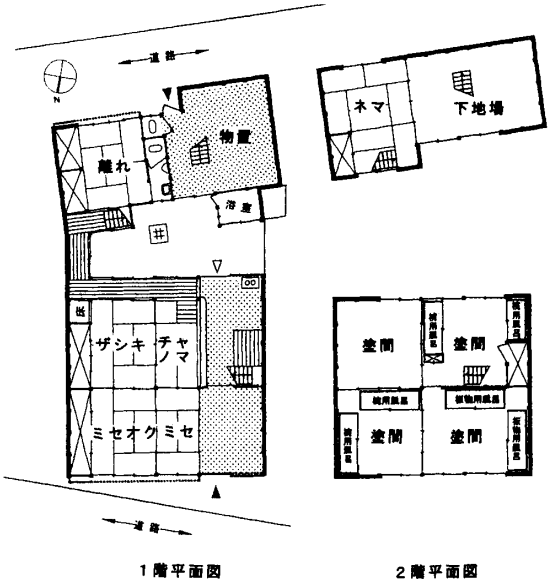

図5．中村政雄家住宅平面図

と高く造られている．塗間のある2階だけではなく，階下の前土間や居室も製品の保管場や荷造り場として用いられ，職住一体の生活が展開されていたことを物語っている．

昭和9年（1934）に塗師屋として普請された中村政雄家（図5）は，2階が4室に分化し，独立した塗間と専用の風呂が各室ごとに備え付けられ，製造に関わる町家としては，整備された平面構成となっている．

塗師屋の平均的な家屋規模は間口4間半～5間半，奥行き3間～4間半である．1階の基本の平面構成は江戸時代末期から昭和時代前期に至るまで大きな変化はなく，近畿の民家の典型である，通り土間形式に2

*5 調査時には建具職に転職し，蔵は撤去されて仕事場となり，塗間も居室に変化していた．

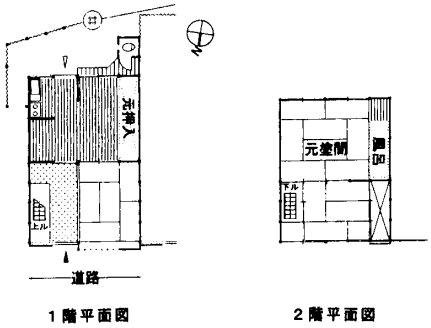

図6．木下達之家所有貸家平面図

列4室構成の床上部分からなる．奥土間は炊事場で，床上部分は，戸口に近い下手土間沿いのミセの間が接客，応対の場であり，ダイドコロは，中村政雄家では室名もチャノマになっているように茶の間である．上手のミセオクとナンドは寝室などの家族の居室で，ナンドは昭和初期には座敷化する傾向があり，オクやザシキの名称もみられるようになる．また，角屋座敷が付帯すると，ナカノマやダイドコロオクに名称が変化している．

賃仕事による職人は，長屋建ての借家に住んでいた．木下達之家の貸家（図6）は大正時代中期の長屋で，土間の片側に6畳，4畳の2室が1列に並ぶ小規模なものである．階段は土間に設置され，2階は8畳，4畳半の2室構成である．塗師職人が居住していたが，戸建ての塗師屋と同様に2階を塗間とし，狭小な生活空間であるが職住が分離していた．

なお，大正10年頃に塗師屋から下地屋が分化・独立する．下地屋は塗師屋の下請け的な存在であった*6．下地職人の生活を記した『塗師のたわごと』[12]を参考にすると，その住宅は平屋建ての長屋で，間取り形式は通り土間に6畳と4畳半の2室が1列に並ぶ構成である．下地師が定盤と呼ばれる作業台を部屋に置き，家族も加わり仕事をする様子が記述されていることから，独立した仕事場を持たずに生活と未分化のままで営まれていたことがわかる．

(2)　絵屋の家屋と作業場

漆器の表面に加飾を施す意匠は，江戸時代後期の天保年間（1830～44）に蒔絵技術が導入され，江戸時代末期に独立した絵屋が出現する[13]が，絵屋が増加するのは明治時代以降である．明治12年（1879）には沈

*6 下地は職工の自宅で賃仕事の形で行われるようになり，その後，独立した請負加工制となり下地屋が誕生するが，塗師屋の下請け的な存在であった．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

図7．蒔絵師花崎芳兵衛家作業場
『和歌山県下諸商独案内』所収．

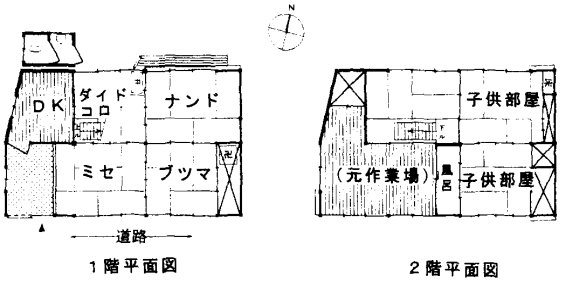

図8．小川清一家住宅平面図

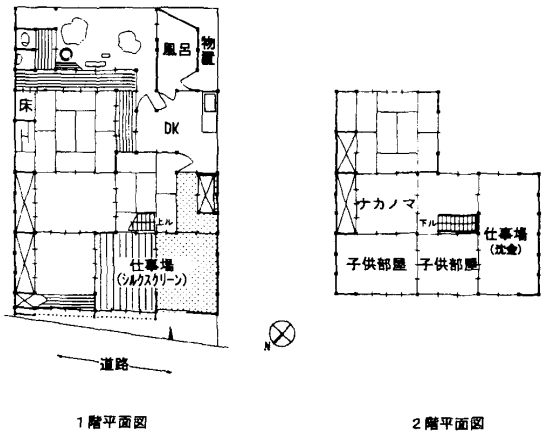

図9．柴本重一家住宅平面図

金意匠法を導入するなど技術開発が行われ，さらに輸出漆器とも関連して意匠の需要が増大する．

明治時代の絵付け作業と家屋との関わりは，明治時代中期の豪商案内記，『和歌山県下諸商独案内』[14] から知ることができる．同書は，県下の豪商を主に建物の外観とともに紹介した冊子で，蒔絵師の花崎芳兵衛家では室内の様子が描写されている（図7）．10名程度の徒弟を含む職人が床に座って絵付け作業や研ぎ出しをしており，部屋の奥の建具が開放されている．中に盆や膳，折敷*7などが棚に並んでいる．このことから，作業場には乾燥戸棚の風呂が置かれていることがわかる．

同図では作業場と家屋の関係が不明であるが，大正8年（1919）に絵屋として建てられた蒔絵師小川清一家（図8）と，昭和10年（1935）新築の沈金師柴本重一家（図9）をみると，主屋の2階に作業場があり，蒔絵師宅では風呂が設けられている．一般に絵屋の作業場は塗師屋と同様に2階に設けられていたことがわかる．主屋の2階は独立性が保たれ，採光面からも精密な作業に適していたと考えられる．1階の間取りは，通り土間に2列4室構成を基本としたもので，ミセの間や土間は製品の保管場所としても用いられた．絵屋の基本的な住まい方は塗師屋と同じである．

(3) 漆屋の屋敷構成と家屋形態

黒江は，吉野から漆を入荷したが，文化元年（1804）頃に漆の精製が始められ[15]，江戸時代末期に漆屋が出現し，明治時代以降に漆の精製業として確立した．

江戸時代における漆の精製は，個々の塗師屋が自家の蔵で行っていた．先に紹介した幕末の菱山幸三家は昭和40年（1965）まで敷地の後方に漆を精製する蔵があり，明治末期の糸川益夫家も敷地の奥に蔵を設けてその中で漆を精製していた．しかし，昭和9年に新築された中村政雄家には蔵がなく，漆屋が確立されるにつれて塗師屋での精製作業がなくなったことがわかる．

一方，漆屋の屋敷構成と家屋形態については，明治以降の建物が現存している．中村泰三家（図10）は，最も古い漆屋の建物で，明治24年（1891）に黒江の中心に位置する堀川沿いで創業している．同家の敷地は，間口5間半，奥行き14間あり，表通りの間口一杯に主屋を設け，裏通りに面して漆を精製する蔵を配置している．漆は，生漆を練捏する「なやし」作業，生漆の含有水分量を加熱蒸発によって除去する「くろめ」作業，そして湯爛した漆液を濾過する過程を経て精製される．漆の精製に蔵が用いられたのは，加熱作業を伴うことと，温度・湿度が比較的一定しているために漆の腐敗や変質を防ぎやすく，材料や製品の貯蔵に適していたためと考えられる．同家の主屋の床上部分は創業時の状態が保たれているが，奥土間は改造によって床上化されている．当初は通り土間で，奥の蔵

*7 底板を折り回した薄板の枠で縁取った盆．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

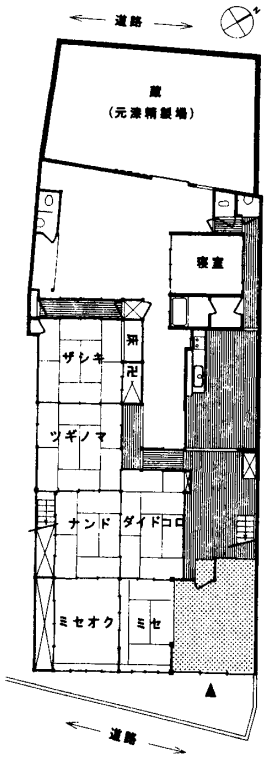

図 10．中村泰三家住宅平面図

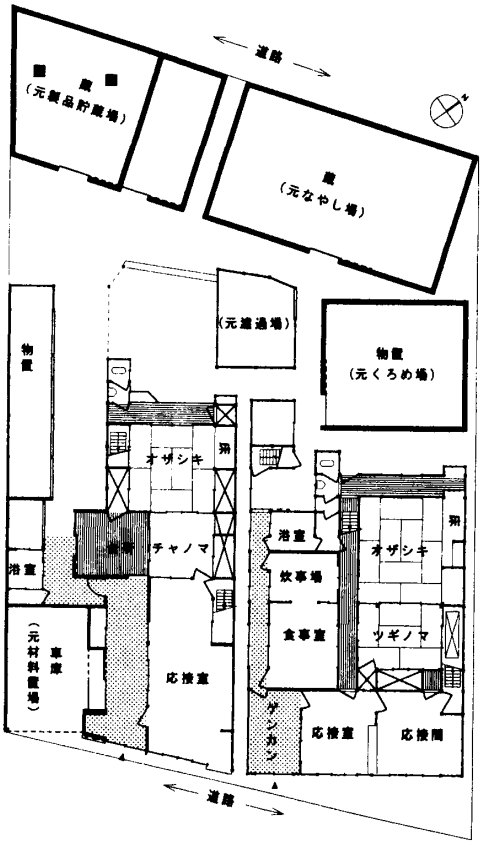

図 11．中村隆俊・哲三家住宅平面図

まで通じ，土間から製品を搬出していた．

中村隆俊・哲三家（図 11）と佐藤正憲家（図 12）は，大正時代創業の漆屋であるが，いずれも他職の家屋を転用したものである．佐藤正憲家は大正初期に質屋であった屋敷を購入し，中村隆俊・哲三家は大正 8 年に折敷屋[*8]の屋敷を譲り受けて漆屋を営んだ．いずれも既存の蔵を転用して漆の精製空間に充てている．とりわけ中村隆俊・哲三家は 2 屋敷が中で繋がり，作業工程に応じて 4 棟の蔵が使用された．

これらの事例から，漆屋では，敷地の奥に蔵を建て，漆の精製や貯蔵を行っていた．

4. 漆器業の近代化と漆器関係家屋の変容

(1) 各職種の近代化と家屋の変容

漆器業の近代化は職人の手作業から機械化，工場生産へと製造方法が変化し，さらに，材料が木製木地・本漆からプラスチック素地・化学塗料へと移行していく形で展開される．ここでは，各職種別に漆器業の近代化による家屋の変化をみていきたい．

漆屋では漆の撹拌も手作業で行われていたが，機械を導入するようになり，蔵での生産から工場化されていった．先に紹介した佐藤正憲家は，大正 13 年に隣家の屋敷地を譲り受けて，黒江では珍しい煉瓦造の漆精製工場を主屋横に設け，作業場を移す．土間にあった炊事場を撤去して事務室に改造し，2 階も従業員の居室に整備している．一方，角屋座敷を取り，敷地奥に家族の居住棟を増築し，職住分離が図られている．また中村泰三家は蔵が手狭になるが，近接地に作業場を拡大できないため，昭和 10 年代に国道沿いの船尾地区に工場と倉庫を建設し，黒江の家屋は仕舞屋になった．

このように大正時代末期から昭和時代前期にかけて，漆屋は工場化され新たな時代に対応していくが，戦後は化学塗料の出現によって，廃業や漆器問屋などに転職する家が相次いだ．

塗師屋においても昭和 30 年代には，プラスチック素地に化学塗料の吹き付け塗装方法が主流となり，伝統的な塗間を増改築して対応していった．排気上，窓を多数開けてダクトを設置し，塗料の飛散を避けるために室内にはトタンを張り巡らすなどの工夫がされた．

[*8] 折敷屋の工房では，明治時代以降になり木地から塗りまでの一貫作業が行われる．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

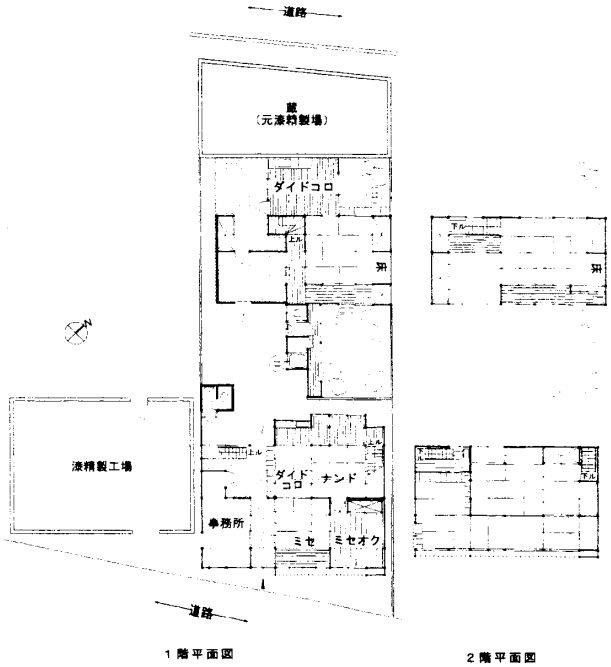

図 12. 佐藤正憲家住宅平面図

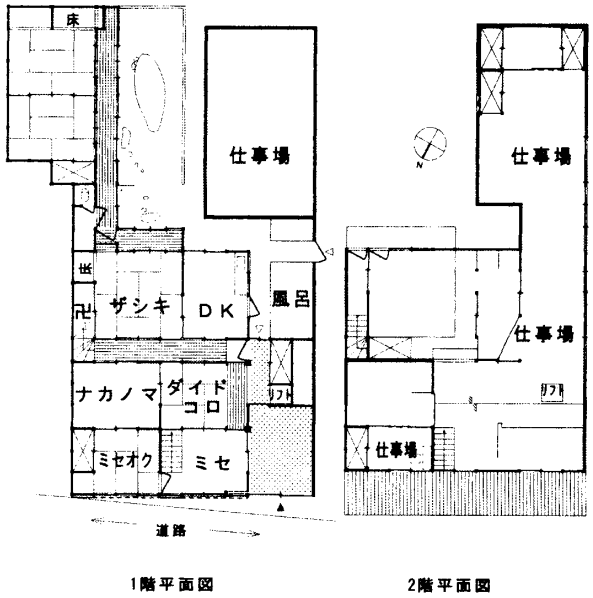

図 13. 木山重治家住宅平面図

また，大量に製品を扱うので，2階を大規模に改造して1室に，あるいは，木山重治家（図 13）のように敷地奥の蔵を仕事場に改変し，主屋と連結して広い作業場を確保するようになった．製品の上げ下ろしにはリフトを用いるなど設備面でも改善が加えられている．

このような増改築を重ねても，町家では狭小であった．さらに，作業場の防火，塗料飛沫による公害問題も発生し，道路の狭隘も含めて対応できなくなり，周辺の船尾や日方地域に仕事場を移し，工場生産へと転換していった．

絵屋はシルクスクリーンの技術が導入され，職人の手から機械による写植になり，昭和 40 年代には大きな変革期を迎えた．転職，廃業する家が相次ぐなか，柴本重一家は昭和 51 年（1976）に沈金からシルクスクリーンに転換した．2階では量産化による製品の上げ下げが困難なために，階下のミセとミセオクをシルクスクリーンのための仕事場に改造している．そのために，生産空間を主屋の2階に設ける伝統的な絵屋の住まい方が変化していった．

組合員数の地域的な変動を捉えると，すでに昭和 32 年には黒江から船尾地区に製造の拠点が移行している．昭和 45 年（1970）には，郊外の岡田地区に紀州漆器団地が形成され，近代的な生産方法に即応した製造所と町が築かれ，製造業者がまとまって移転していった（表 1）．

(2) 漆器関係家屋における生活空間の変容と拡大

職住一体の生活が展開されてきた伝統的な漆器関係の町家は，他職に転用されるものもあるが，大半は仕舞屋になった．漆器生産に用いられた空間は，昭和 30 年代から 40 年代には生活空間に転じていく．生産の場であった主屋の2階と蔵は，物置，子供部屋，その他の家族の居室に改造された．蔵は当初，生活財の収納場として用いられたが，老朽化と共に撤去され，居住空間や作業所，駐車場に変容し，屋敷構成も解体していった．

他方，住宅の近代化は黒江の町家にも及び，生活様式の洋風化が進むなかで，1階のミセやミセオクは応接間に改造され，奥土間の炊事場は床上化され，多くがダイニングキッチンとなっている．しかし，通り土間は比較的温存され，中村隆俊・哲三家のように下手に通り土間を残しながら床上化される形態や，菱山幸三家のように別棟で土間の外部に角屋形式で張り出す形態がみられる．さらに，同家では，炊事場の改造と共に主屋外にあった浴室や便所は内部に取り込まれている．

5. おわりに

日本の伝統産業のひとつである漆器の生産地として，輪島，会津，黒江などが知られているが，産地によって髹漆作業の場が異なっている．輪島や会津の塗師屋は蔵を用いたのに対して，黒江の塗師屋は主屋の2階

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表 1．紀州漆器地区・職種別組合員数*[1]

地区	黒江				船尾				日方				岡田			その他			
	昭和 32 年	40 年	48 年	61 年	昭和 32 年	40 年	48 年	61 年	昭和 32 年	40 年	48 年	61 年	昭和 32 年	48 年	61 年	昭和 32 年	40 年	48 年	61 年
問屋	37	31	25	22	36	43	41	33	10	6	8	8		9	26			6	15
塗装	89	78	58	44	99	73	59	42	24	25	10	5		17	20	2		6	7
木地	14	10	4	2	62	33	9	4	35	17	5	3		1	2	1			2
下地	52	3			48	13			7	1			14			2			
意匠	40	47	20	9	44	49	32	15	2	1	1	1			2	3		1	1
木箱					12				1										
春慶	2	2	1		4	1	1		12	4	1								
仲次	5				8	8			1				1						
成型			3	3			3	1			2	1		2	5			12	10
塗料			5	2			8	4			1	2			3			1	1
計	239	171	116	82	313	220	153	99	92	54	28	20	15	29	58	8		26	36

*[1] 昭和 32 年～48 年の統計は『海南漆器史』より，61 年は『紀州漆器のあゆみ』より引用作成．

で髹漆作業を行い，蔵は漆の精製のみに使われてきた．また塗師屋だけでなく，絵屋も主屋の 2 階を主な作業場とし，生産空間と生活空間が上下階に分化した住まい方が行われてきた．

このような漆器の製造形態がとられた背景には，江戸時代から都市的様相を呈し，限られた町場で空間の高密度利用を必要とした宅地状況が根底にあったと考えられる．2 階屋にすることにより，一般の町家の主屋でありながら製造場の独立性を確保することができた．独立性が確保でき，気候条件が製造に適合するならば，主屋の 2 階は採光面からも精密な作業に適し，合理的な製造場であった．

昭和初期は紀州漆器の最盛期とされるが，『郷土誌』[16] の職業別戸数によると，昭和 4 年（1929）には塗師屋 529 戸，下地屋 100 戸，蒔絵屋 125 戸を数え，全戸数 1,802 戸から考えると，多くの製造業者がいたことがわかる．

他方，漆を精製する漆屋は同年には 20 戸と数も少ない．漆屋は塗師屋，絵屋と職住の共存の仕方が異なっている．敷地は奥行きが深く，漆の精製に用いられる後方の蔵と前面の主屋が独立しながらも平面的に連係して，漆屋が営まれていた．

漆器業の近代化は，手工芸的な製造から機械による大量生産に変わるなかで進んでいくが，近代化が家屋に現れる時期は，職種により異なる．大正時代末期から昭和時代前期には，工場生産性の強い漆製造業の分野が伝統的な町家の蔵から工場化され，職住分化が始まる．塗師屋や絵屋は，昭和 30 年以降，塗間の増改築や階下への作業場の移設などの工夫を重ねていくが，対処できなくなり，伝統的な町家から仕事場が分離していく．

近代以降は産地の地域指定がなくなり，黒江周辺地区に漆器関係家屋が拡散していくが，昭和 45 年の紀州漆器団地の建設により，近代漆器産業に適した建物やコミュニティが郊外に築かれることとなり，職住一体の町家の住まい方も姿を消していく．仕舞屋となった家屋では，住居としての機能に適合させるように，生活空間の拡充，住生活の向上が図られていく．

引　用　文　献

1) 上田　篤，土屋敦夫：『町家共同研究』，鹿島出版会，東京，113-124（1975）
2) 湯浅町教育委員会：『紀州湯浅の町並み』，湯浅町（2001）；千森督子，中嶋節子，谷　直樹：紀州湯浅の町並みと町家について，生活科学研究誌，**2**，25-105（2003）
3) 上田　篤，土屋敦夫：『町家共同研究』，鹿島出版会，東京，324-334（1975）
4)『紀伊続風土記』（仁井田好古編）は，文化 3 年（1806）から天保 10 年（1839）にかけて編纂された．
5) 半田市太郎：『近世漆器工業の研究』，吉川弘文館，東京，34，36，38（1970）
6) 白木小三郎，千森督子：黒江の町並みと町家，観光資源保護財団調査報告書，第 12 号（1984）；千森督子：歴史的町並み，海南市黒江の保全，修景に関する基礎研究，『平成 9 年度わかやま学研究成果報告書』，189-213（1999）
7) 池浦正春：在町工業，黒江漆器業の近世発達史，海南市史研究，第 5 号，38-79（1980）
8) 池浦正春：紀州漆器業発達史，『紀州漆器のあゆみ』，和歌山県漆器商工業組合，和歌山，19-20（1986）；冷水清一：『海南漆器史』，私家版，和歌山，173-174（1975）
9) 小松大秀，加藤　寛：『漆芸品の鑑賞基礎知識』，至文堂，東京，218，239（1997）；平沢に関しては，長野県楢川村平沢の漆工房石本玉水氏からの聞き取りによる．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

10）上田　篤，土屋敦夫：『町家共同研究』，鹿島出版会，東京，167-175（1975）
11）㈱和風建築社（編）：『和風建築シリーズ７　座敷』，建築資料研究社，東京，51-67（1999）；灰野昭郎：『漆　その工芸に魅せられた人たち』，講談社，東京，98-104（2001）
12）塩路　滋：『塗師のたわごと』，私家版，和歌山，212-313（1981）
13）池浦正春：紀州漆器業発達史，『紀州漆器のあゆみ』，和歌山県漆器商工業組合，和歌山，19（1986）
14）海南市教育委員会所蔵
15）冷水清一：『海南漆器史』，私家版，和歌山，173-174（1975）
16）和歌山県黒江商工学校（編）：『郷土誌』，和歌山県黒江商工学校，和歌山，35-38（1931）

NII-Electronic Library Service